

山梨県上野原市西原における伝統智1

金子美樹 (植物と人々の博物館研究員)

中川家の畑仕事 1年 (3月～5月)

3月

山吹の花が咲くころの種まき

- ・じゃがいも、
- ・ごぼう（発芽が遅いので早く蒔く）
- ・長いたきがわごぼうは掘るのが大変なので時期をずらす。
- ・こんにゃく（深く入れる。水はけの良いところ。秋に種をとっておく）

4月

・うぐいす菜・かぶ・きゅうり・こまつ菜・とうもろこし・おかぼ

4月中旬：土寄せ（麦のみ / 光をあてる / 雑草を防ぐ）、
土入れ（一株ずつ土を中に入れる）

4月下旬：夏蕎麦（70日で収穫）

5月

・里芋・やつがしら・春いんげん・トマト・なす・ピーマン
・雑穀類（はとむぎ（間引き、移植）、ほもろこし（移植可）、
もちきび、たかきび、ひえ（間引き、移植）、シコクビエ）

★間引・移植は7月中旬。葉が5～10枚、15cmの丈になった頃に。

★5月に雑穀を蒔く理由：麦の収穫後（大麦：6月下旬、小麦は7月下旬）に植えられるように準備しておく。

★山の幸：竹の子、わらび

5/14：斜面の耕し方

鍬の持ち方(図1)：右手は柄をしっかりと握り、
左手は甲を筒にして柄をスライドできる程度に軽く掴む。
鍬先を土に差込む時は、左手は柄を添える程度で、
右手で鍬を後ろに引いて土を耕す。

右手を引いたと同時に左手は右手の位置まで移動させる。
鍬は振りあげず、土の表面をひきずるように移動させると
疲れないし、土が均等になれる。

鍬の入れ方(図2)：斜面の下の足元から順番に斜面の上へ向かって3段階耕す。

5/15: もちきび（白）の種まき

耕した畑一面に石灰（灰でも良い）をまく。

（化学肥料 既成のもの：塩カリ＝3：1）

一週間で発芽する。発芽後15～20日後に、溝の間の草かき。

6月上旬：草取り、間引きを同時に行う。

味噌づくり

5月下旬：とちの花が咲くころの種まき

・大豆（もろこしやシコクビエなど移植してよいものの前に植える）

5月25日★蚕が糸をはきはじめる



▲オチアイモ、ツヤイモ



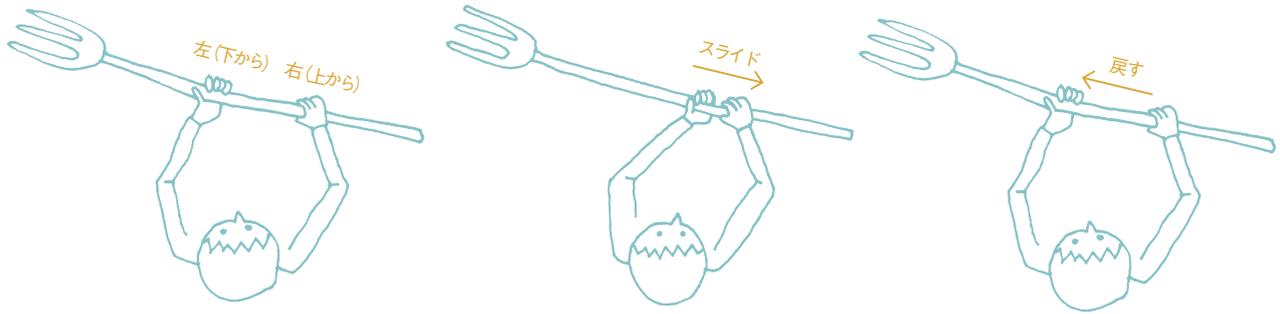
▲ジャガキッズパープル



▲ネガタ、(フジ種)成沢村から

【図1：鍬の持ち方】

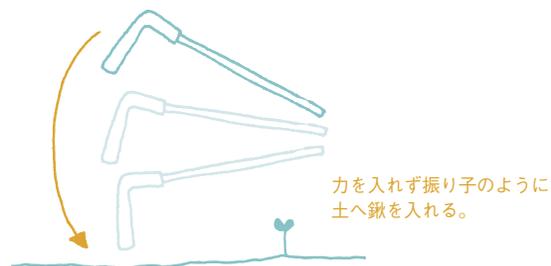
※畑の耕す方向により左右の持ち方は逆になる。



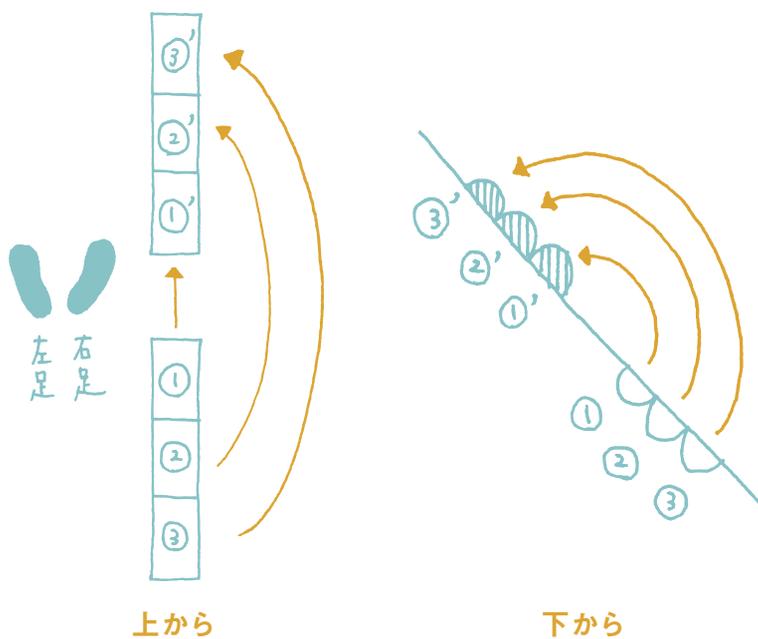
①右手はしっかりと握る。左手は添える程度に軽く握る。振り子の要領で、鍬の重さだけで鍬先を土に対して斜めに差す。

②鍬先を差し込んだ直後に、左手を右手の方にスライドさせる。右手は土を寄せて引っぱる。

③土を後ろへ寄せる際に、左手を元の位置にスライドさせて戻す。



【山斜面の畑の耕し方法】



①左足前の土に鍬を差し、左足元の後ろ①'に土を置く。この時、鍬を持ち上げないこと。(ムダな労力を使わない)

②①より先の土に鍬を差し、①'より後方に土を置く(②')この時、鍬は、土の上をなぞるようにスライドさせる。

③②より先の土に鍬を差し、②'より後方に土を置く(③')この時、②より大きく半円をえがくように鍬を土の上ですべらせて土を平にならしておく。

中川家の畑仕事 1年 (6月～8月)

6月

6月：おかぼの追肥：草取りをした後に、土寄せをして草を土の中に入れる。

- ①おかぼの株元の土に鍬を入れて土をおろす。
- ②真中に鍬を入れて土を引きずりおろして株元へ
- ③上側に鍬を入れて株元へ入れる。

6/12: 大豆の苗を定植 (5月下旬種まきしたもの)

直播だと鳩に食べられるので、苗床で作る。苗床で育てると同じ高さで育つ。葉が4、5枚になったら定植。

トウモロコシや里芋など畝 (うね) 間の広い作物の畝間に定植する。(畑の有効利用)

畝間に刈取った青芝をひく。(保湿+肥料効果)

苗は、盛った土に寄りかかるように斜めに植えても良い。(早く植えるコツ)

- ・雑草取り・つぎ木・やた立て
- ・6月～7月上旬：麦刈取りして、1日2回やたで干した後に2週間以内に脱穀 (すぐ食べれるように)
- ・夏蕎麦刈取り・脱穀

梅雨の時期に雑穀の畑に入ると穂が出ないのでその前に草取りをすること。(粟は特に) 緑が濃いと穂がつかない。

こんにやくの芽が出る前に「青芝」を土の表面に厚く引く
→根の乾燥を防ぐ、草が生えない、肥料

6月下旬：蚕の繭が成熟。1週間でさなぎになる。

まゆかき→炭で火あふりで茹でる。

土室 (つちむろ)：高さ2m、90～100cmの板を10段。

柿の葉がバリバリに乾けばさなぎが死んでいる証拠。

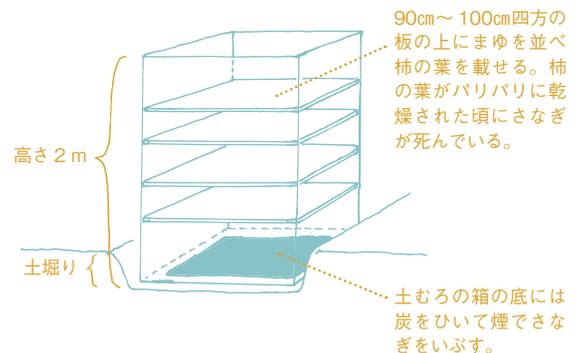
- ・大豆、えんどう、じゃがいもの収穫
- ・人参・あずき・大根・白菜
- ・秋蕎麦 (70日)

7/23: 大麦・小麦の脱穀

機械で脱穀し、唐みにかける

出た粃穀と藁はトタンの上で燃やして灰に。蕎麦の畑にまく。

★種子蒔き用は、千刃コキで。



7月

麦の脱穀や蚕も終わる→一休みができる

河原で集まってとんとん焼き。麦藁 (1・2束) に火をつける祭

8月

土寄せ (倒れ防止)

- ・大根・白菜・ほうれん草・きやべつ

8/18: 蕎麦の種蒔き

溝を切る： 間 60cm

株間：男性の足1つ分の幅 (さつまいもと同じ)

脱穀した麦藁を燃やした灰と肥料をひとつまみずつ掴んで、足一つ分の間隔で蒔く。

その上に、蕎麦の種をひとつまみ重ならないように指でひねりながら蒔く。

種の上に、溝掘りで盛った土を厚くならない程度にかぶせる。

中川家の畑仕事 1年 (9月～3月)

★=知恵や畑以外の作業、祭など

9月

■ 9月：猫の手（うるちあわ）の脱穀方法

- ・穂先が長い：うるち
- ・穂先が短い：もち

1. 枝を 20cm 位残して穂を刈る
2. シートの上で 3、4日上下ひっくり返して干す。
3. 穂の身がバラバラほぐれたら、ビール瓶の底面で叩き脱穀。

9月上旬：きび、ひえの刈取り

★ 9月 17日：一ノ宮神社秋祭り

10月

あわ（ねこの手・飯粟）、もろこしの刈取り
こんにゃくの収穫

・エンドウ、麦蒔き

★穀物類の種蒔きがすべて終了し、慰労会

ねずふたぎ（ねずみの口をふさぐという意味）

11月

天地返し（冬伏せ：枝葉を土の中に入れておくと酸素を入れて害虫を殺す）、
落葉拾い

12月

・大豆の収穫（脱穀は1・2月：くるりん棒で）

11月 20日 & 1月 20日

★恵比寿公祭り（白いご飯をてんこ盛り。長男が食べる。）→父が出稼ぎに出るから。

1月

麦踏み（堆肥の上に種を蒔くので、根が乾くのを防ぐ、
冬中根を土にしっかりと根付けさせるため、霜柱で浮き上がらないように）

・つぎ木

・北側に土寄せ（北風を防ぐため、草止め）

2月

3月

やたの準備（竹・枝）

春の仕事

西原の春の朝はまだ寒く、午前中9時過ぎにやっと山の峰から太陽が覗く。
張り詰めた冷たい縁側のガラス窓に光が差し込み、ミシッと音が鳴り暖かくなったところに足袋を履く。
春の畑作業は大忙し。雪解け後、天地返しをした畑の土に鋤を入れ均等にならし、等間隔に畔をつくる。
納屋に去年の夏・秋から干しておいた種子蒔き用の穂から、丁寧に手でしごいて種子を取る。
腰の高さから薄く種子を蒔き、肥料を入れる。
せっかく蒔いた種子を野鳥に食べられないよう、防止用テープを畑中にはりめぐらす。
野菜や穀物の種類によっては、早春の間に苗床で育てた苗を畑の大地に定植する。
種蒔き作業の合間に、大きなゆで釜に冬に育てた大豆を惜しげもなく入れて、自家製の味噌づくりにとりかかる。



▲ 春は生命が息吹く季節。山奥深い西原では、山吹き、藤など春を告げる花々が、春の作物の種子を蒔く頃合いも知らせてくれる。



▲ 雪解け後、天地返しをした畑の土を均等にならし、等間隔に畔をつくる。



▲ 鳥対策目散しテープ張り



▲ 大豆の苗の定植



▲ 大豆の苗を植えた家裏の傾斜畑



▲ 庭先で取れた春の幸ふきのとうを天ぶらに。周りの葉を広げて衣を付けるとカラッと上手に揚がる。

夏の仕事

夏の畑仕事は、作物の成長と共に多種多様。草むしり、水やり、やた立て、夏麦刈り、穀物の籾干し、脱穀など。梅雨の頃は、昔は養蚕作業があり雨が降っていても休む暇はなかった。ようやく一休みできるのは、夏麦の脱穀や蚕の世話が終わる7月のお盆。かつて村人は河原に集まり、麦藁に火をつける『どんどん焼き』という祭を催して短い夏を過ごした。



▲ 陸稲と雑草。区別がつくようにある程度陸稲が成長してから雑草を抜く。



▲ やた立て。穂が垂れて成長を妨げないように、竹や枝木を斜めに刺して穂を支える。



▲ 夏の麦刈り。



▲ 昔ながらの方法で脱穀。千刃こきでこした籾を唐みにいれる。詰まらないように手で籾を均す。



▲ 納屋の屋根の上で籾干し。



▲ 自家製梅ジュース。夏の農作業の合間に冷たい梅ジュースで一服。

秋の仕事

秋は様々な農作物の収穫と乾燥作業、穀物類の脱穀が巡回する。
食用の穀物は、機械の脱穀機で一気に脱穀。
来年の種子蒔き用に納屋に穂を吊るしておく。
畑の天地返しも忘れずに。



▲ 機械で麦の脱穀



▲ 収穫した雑穀を来年の種まき用に納屋の2階に干す



▲ 雑穀で収穫が最後になる高さびの網かけ作業



▲ 10月には村人総出で秋祭りを開催。伝統の神楽舞が披露される。



▲ 納屋の軒に、艶やかな干し柿が秋風に揺れている。

冬の仕事

雪が到来する前に、雑穀で最後に収穫した高キビや大豆などの脱穀作業の他、冬に食べる分だけ白や水車小屋で穀物を精粉する。

また、畑に出られない間は、やた立て用の細木を集めたり、鋤などの農機具の修理、草燃しなど春へ向けて準備をする。



▲ 高キビの千刃コキ。



▲大豆は木槌でたたいて外皮を剥く



▲高キビを臼でこすって粉を取る。



▲昔の木製臼。紐を左右に動かして粉取りや粉にする。



▲農具の準備1：やた立て用の細木を近所の村から集める



▲農具の準備2：鋤の楔の保守も自前で



▲貴重なわさびの葉漬。根のわさびより辛い。



▲冬の行事：初午祭り。2月初めの午の日に行う祭。竹で作ったランタンを一宮神社にて灯す。



▲草燃し。灰をつくり肥料として使う